

論文内容の要旨

報告番号		氏名	平井 香衣子
Impact of atrial fibrillation on the prognosis of acute decompensated heart failure with and without mitral regurgitation (和 訳) 僧帽弁閉鎖不全症を伴うまたは伴わない非代償性急性心不全患者の予後に心房細動が与える影響			

論文内容の要旨

【背景】

心房細動と僧帽弁閉鎖不全症は、心不全患者によくみられる。僧帽弁閉鎖不全症を伴う心不全患者の予後に心房細動が与える影響はまだ知られていない。

【方法と結果】

NARA-HF 研究に登録された(急性非代償性心不全のため 2007 年1月から 2016 年 12 月に当院に入院した)1074 例のうち、追跡データのない例や院内死亡例を除いた 867 例を対象とした。平均年齢は 73 歳で、42.7%が女性であった。退院時経胸壁心エコーで軽度以上の僧帽弁閉鎖不全症と心房細動を指摘されたことがあるかどうかで4群に分類した。外科的手術の対象となる症例は除外した。主要評価項目は心血管死亡と心不全関連の再入院の複合エンドポイントとした。追跡期間は中央値 621 日であり、398 例(46.8%)が主要評価項目に到達した。軽度以上の僧帽弁閉鎖不全症を伴う心不全患者は左室駆出率にかかわらず心房細動群は非心房細動群と比較して主要評価項目が有意差を持って多くみられたが、僧帽弁閉鎖不全症を伴わない心不全患者では心房細動の有無は主要評価項目に関与しなかった。年齢、性別、腎機能などの各因子調整後も有意差が見られた(主要評価項目 ハザード比[HR] ; 1.381 95% 信頼区間[CI] ; 1.022-1.866 ; P=0.036)。さらに軽度の僧帽弁閉鎖不全症を伴う心不全患者のみのサブグループ解析でも同様の結果が得られた。

【考察】

軽度から中等度の僧帽弁閉鎖不全を伴う非代償性急性心不全患者では、心房細動は心血管死亡と心不全関連の再入院のリスクを高める結果となった。このことから、そういった心不全患者においては心房細動あるいは僧帽弁閉鎖不全症への治療介入が必要であることが示唆される。軽度から中等度の僧帽弁閉鎖不全症への外科的手術は侵襲的である一方で、併存する心房細動へのカテーテルアブレーションは実用的である。本研究では心房細動へのカテーテルアブレーションを行った症例はわずかであり、カテーテルアブレーションの有用性まで評価することは難しく、その点はさらなる研究が必要である。

【結論】

僧帽弁閉鎖不全を伴わない非代償性急性心不全患者では心房細動と予後との関連は認めなかったが、軽度から中等度の僧帽弁閉鎖不全を伴う非代償性急性心不全患者では心房細動が予後不良因子であった。